

ブラメルドにおける教育的価値論

金 丸 弘 幸

序

文化的実在の改造を至上の命法と考え、文化的、社会的視点に立って進歩主義、本質主義、永遠主義教育哲学三つの立場の寄与を自らの中に総合しようとし、改造主義教育哲学の体系化をはかったのがブラメルド (**Theodore Brameld**) である。

社会的自己実現を包括的な最高価値として、その価値実現を志向したブラメルドの価値論に基礎的なアプローチをこゝろみたのが以下の小論である。

特にブラメルドの「**Toward a Reconstructed Philosophy of Education.** (改造主義教育哲学の建設 1956 年), **Education for the Emerging Age.** (来るべき時代の教育, 1957 年), **Philosophies of Education in Cultural Perspective.** (文化的眺望における教育哲学, 1955 年) を中心としてブラメルドの教育哲学の世界観の基礎のもとに、価値論への方法論的アプローチに焦点を合わせ、いわゆる社会的一致の究明をこゝろみた。すなわち実在としての集団葛藤——人種、階級、国家等の集団間の抗争——は「善なる生活」を求め、「悪しき生活」を回避しようとたたかう点で価値論と関係し、認識論における目標追求と社会的一致を通しての社会的自己実現、世界文化、世界政府樹立の構想も同様に価値論に関係するからである。

1. ブラメルドにおける現代的危機意識

—— 改造主義の成立基盤 ——

我々はブラメルドの改造主義教育哲学思想の成立基盤とも云うべき彼の問題意識を、消極的には彼の現代に対する「危機意識」の中に、積極的には古きものに代って新しいものが進行しつつあるという科学工学的、政治、経済的な「革命的時代」とし

ての彼の現代解釈の中に求めることができる。

現代は原子分裂による文明破壊の恐怖にさらされ、政治、経済問題はもとより、制度、習慣、信念、信仰殆んどすべてのものが慢性的な不安定、混乱、不確実さに毒された危機文化の状態にあり、伝統的な信念様式も、現代の信念様式もこうした動揺と混乱を払拭できない世界史的革命期にあるというのがブラメルドの主張である。要するに現代は国際的にも国内的にも深刻な葛藤の世紀であり、現代こそ大規模な改造が必要であると考えられた。こうした制度上の不均衡と道徳的混乱や不安に悩む現代的な危機は、ブラメルドによればすべて文化が導かれる価値の諸様式の混乱に帰因するものである。こうした時代にこそ新しい平衡を樹立する方法の探求が要請されなければならない。したがって、教育の第一の課題は何よりも先ず人類が依拠することのできる望ましい強力な価値を探求、描写することにある。その為にはこうした変化と動揺の現代を分析し、解明するとともにこれらの原因と特質を最大限に自覚し、未来のコース設定に当らなければならないというのがブラメルドの問題意識であると思われる。こうした問題意識のもとに、文化を望ましい目的へ導き形成しうるものを探求する改造主義こそ我々の要請にこたえうるものであるとブラメルドは確信していたのである。即ち「破壊の恐怖は改造への至高の機会である———実に機会以上のもの、命法¹⁾である」と観じたブラメルドにとって改造主義の目標中心の教育こそ他の如何なる機関にもまして未来の為に現実の破壊的な諸力を克服し、科学的に検証可能な希望を人類に与えうるものであった。

2. 価値論における世界観的基盤

(i) 実在論的側面

ブラメルドの価値論にアプローチする為には、先づ第一に彼の实在論と認識論にその基盤を求めなければならない。实在論的な側面から先づふれてみよう。

改造主義は超自然界の優越性をはかる如何なる形而上学にも、又既存の秩序の客観的な体系にも反対する点においては進歩主義者と変りはない。然し、改造主義が人間の政治的、経済的、社会的、道徳的経験、即ち、文化的實在に注意を集中し、文化的實在の分析と解釈、特に集団の経験を重視している点に注目しなければならない。即ち、ブラメルドの实在観は集団を重視するものであり、しかも生活している人間の造り出した環境に密接に結びついている。したがって、人間の経験が社会的文化的に決定づけられているという事実を離れてブラメルドの实在論を考えることは出来ない。

ではブラメルドは「文化」をどのように考えているのだろうか。この点についてブラメルドは「文化は社会の成員として人間によって獲得された知識、信念、芸術、道徳、法律、慣習その他の才能や習慣などを包含する複合的全体である²⁾」というタイラー (Tylor) の定義を高く評価している。要するに、文化は人間が達成したすべての成果であり、人間が何らかの影響を及ぼすすべての環境を内包しているというのがブラメルドの文化解釈である。

こうした文化観のもとに現代を眺める時、ブラメルドの文化的实在論を貫流するのは、先にも述べたような現代的危機感であり、現代文化は諸勢力の葛藤する重大な時期にあるということである。人種的、国家的、宗教的な文化間の葛藤はもとより、国際的戦争、内乱をも含めた集団葛藤及びこの集団葛藤と相関的に働く集団忠誠は今日の一般的な現象であると考えられ、又、ブラメルドの实在論の中心問題でもある。そして、もう一つの実在の基本的な要素として歴史が取り挙げられなければならない。ブラメルドによれば、歴史の分析は社会的斗争、自由の制限と伸長、人間文化の有機的統一への傾向、過去、現在はもとより、未来をも考慮に入れなければならないものと考えられた。特に未来は、厳密な意味では改造主義の实在の一部として重視されている。即ち、我々が未来を志向し、未来への可能性を思考する時、未来は現在を動かす一つの方となり、真の实在をおびると考えられた。

こうしたブラメルドの实在論は彼の価値論の意味する社会的、文化的、教育的プログラム展開の基盤として重要なばかりでなく、又、その価値論の出発点でもあると解される。

次に、価値論に対するブラメルドの認識論上の関連はどうだろうか、この点について以下簡単にふれてみよう。

(ii) 認識論的側面

实在論が如何なる絶対的形而上学も客観的秩序の体系も認めないのと同様に、認識論も絶対的な形而上学的価値の存在を否定し、それとともに究極的な真理の存在をも認めていない。更に、人間の目標を運命的に固定化してみることにブラメルドは懐疑的である。要するに改造主義の認識論の方法と目的を決定づけるものは人間の現実の経験的、実験的な関心であるといえる。

ブラメルドの認識論の中心点は「社会的一致」を通しての真理追求にあり、「社会的一致」は知識追求、真理探求過程の中心的な操作概念として重親されている。ブラメルドはこのほかにも認識論上の概念として(1)目標追求、(2)直覚的意識 (**Prehension**)、(3)非合理性、(5)イデオロギー、(5)ユートピア、(6)目的と手段としての集団精神の役割

を重視している。然し、これら諸概念のすべては価値論に対する並列的な操作概念として考えられているというよりも、寧ろ社会的な一致に対する副次的な役割を果たすものと解すべきであろう。

とに角社会的な一致は「目標追求と未来構成という重大な機能にとって最も重要な、唯一の規範たるべきもの³⁾」である。

社会的な一致を通しての真理追求に欠くべからざる過程として、ブラメルドは「証拠」「コミュニケーション」「同意」「行動」の四段階のプロセスを重視し、こうした過程を経て真理性が検証され、価値が求められるというのである。この点については後の「価値論への方法論的アプローチ」のところで述べるので此処では省略するが、結論的にはブラメルドの認識論は集団過程としての認識論である。勿論彼が個人の問題を全く無視しているというわけではない。非合理性、直覚的意識の個人的側面に注意が払われ、集団に対する個人の脱逸、不同意の余地も考えられていることは確かである。然し、集団の知性を信じ、集団を基盤とした認識過程を重要視した点にブラメルドの特徴があるといえるであろう。個々の問題については価値論との脈絡において後章でふれることとする。

(iii) 改造主義教育哲学の未来志向性

改造主義が未来を志向し、重視するという構想はブラメルドの進歩主義教育哲学批判のうちにも明らかに示されている。進歩主義者は現在を重視し過ぎ、保守主義者と反動主義者——本質主義者と永遠主義者——は過去を強調し過ぎるとブラメルドは批判する。即ち、進歩主義は目的を犠牲にして余りにも手段に焦点を向け、我々の進むべき方向に明確な解答を与えることができないと主張する。然し勿論進歩主義の実験的方法論の功績を否定するものではない。

このように進歩主義を批判する改造主義の核心は価値実現への未来を重視し、未来への方向づけをする点にある。ブラメルドにとって未来の世界は理論上も実際上も普通の一般市民が支配すべき世界であり、ここに彼のユートピア的理想の具体化を熱望する意図がみられる。即ち、それは「すでにはっきり認められる工学上の諸能力があらゆる人種、国籍、信条を有する大衆の健康、豊かさ、安寧を創り出す為に解放されるような世界でなければならない。国家主権が国際的権威に従属する世界たるべきである。……大多数の人びとが自らの運命の主権的決定者なのである⁴⁾」。要するに未来としての歴史は、人間の希望と目的を現実化する人間の歴史であるとする改造主義者としての信念のあらわれである。こうした改造主義の未来への志向は、自然と人間についての科学的知識の堅固な基盤の上に未来の為の文化様式をデザインすることに

あった。ブラメルドの信念はあくまでも実践可能な手段を伴った未来への目標を樹立することにあつたといえよう。先に、ユートピアの具体化された目標と述べたものも、人間の可能能力の理想化を伴うものであり、実現可能なヴィジョンをいただくものという意味であろう。したがって、ブラメルドの意図する未来志向は決して空想的、非現実的な飛躍的な未来のことではない。即ち、改造主義は「魅力ある先見の(magnetic foresight) 哲学——人びとが本来もっている強力な手段の発展を通して獲得しうる目的の哲学——である⁵⁾」。要するに、目標追求を人類の本来の特質とみなし、目標こそ人間の努力のモチヴェーターであるという考えである。ではブラメルドのいう社会的自己実現に到達する為の在るべき未来像、換言すれば、未来の文化目標に対する具体的な「構造」についてはどのように考えられているのだろうか。次にその点にふれてみよう。

(iv) 未来文化への規範的デザイン

未来文化建設の為に、換言すれば社会的一致を通して社会的自己実現という最高価値が実現され、人間のよき生活が樹立される為には未来の社会はどのようにあるべきか、こうした点について制度と実践——政治的、経済的、科学的、教育的等々——特別なアウトラインを述べたのがブラメルドの未来文化への規範的デザインである。然しそれは決して絶対的、究極的な目標ではなく、絶えず社会的一致を通して批判され、改造されうるものと考えられた。何故ならば、それは多数の一致によって獲得すべき文化政策だからである。そしてそれは未来の文化建設において案内者としての役割を果さなければならないものである。したがって「デザイン」の内容も我々が樹立できるし、又樹立しなければならない世界文化に貢献しうる理論的、実践的、あらゆる知識を包含することが要求されている。

以上のような構想のもとにかゝげられたブラメルドのデザインの大要は次のとおりである。

- (1) 消費者の最大限の欲求を満し、能力、興味に応じた全市民の完全雇用を保証し、家庭に十分な収入を保証する富裕な経済。
- (2) 主要産業及び農業企業を多数者の支配のもとにおき、公益事業の統合監督、地方分権的な管理と参加及び中央集権的な権威と指導の間の均衡をはかる等々に責任をおうことのできる政治体制。
- (3) 科学的研究助成、科学的発見の利用と科学的実験の自由を保証する科学的秩序。
- (4) 創造的な個人と集団が文化の再創造に参加することを認め、芸術的才能を促

し、芸術における表現の自由を保証する芸術形式。

(5) 教育費国庫負担，一貫した教育制度。

(6) すべての者が文化生活に参加できる人間的秩序。

(7) 国家主権が国際的権威に従属することに諸国家が同意し，未開発国に対して民主的援助を行ない，国家間の自由な交流を促進する世界民主主義があげられた。

以上は「比較的正常な文化の状態にもまして極度に変化の激しい時代は鋭い批判と遠大な計画を必要とする⁶⁾」というブラメルドの問題意識の凝集であり，個人と集団の目的，価値を条件づけようとする長期の文化的デザインである。ブラメルドにとって，それは実現可能な規範的デザインであり，こうしたデザインと，その構造，方法の十分な尺度となるべきものこそ彼の価値論における社会的一致を通しての「社会的自己実現」であると考えられた。

3. ブラメルドの教育的価値論

(i) 規範的価値内容

ブラメルドにおける価値論は，消極的には，如何なる形而上学的，絶対的な既存の価値論に対しても反対するものであり，積極的には，価値は目標を追求し，それに到達せんとする個々集団の「欲求充足」として定義される。しかもそれは個人と集団の経験に基づき，社会的一致による真理追求の過程から切り離すことのできないものである。こうした社会的一致によってその妥当性を決定する為の必要条件として，ブラメルドは，価値に関する真理も証拠，コミュニケーション，同意，行動の原理に従って決定されるべきであるとしている。したがって，価値は決して固定的，終局的なものではない。絶えず批判と修正に委ねられなければならない試案的性格をおびたものといえる。換言すれば，ブラメルドの価値概念は決してアプリオリな信念としてのものではない。生きた文化的實在の所産として，現実に基づいた行為の所産として結晶されたいわゆる望ましきものであり，規範的概念として認められる。

要するに，改造主義における価値は文化の脈絡の中で追求されるものである。ブラメルドは人間の追求する目標——欲求を価値として考え，具体的に次のような12のリストを価値として記述している。それらは何れも現実の生活に立脚した最も基本的，経験的，心理学的事実を通して導き出されたものといえる。即ち，「十分な栄養物」，「適度の衣服」，「住居とプライバシー」，「性的表現」，「身心の健康」，「仕事と収入」，「交友，相互献身，所属感」，「承認，理解，地位」，「新奇さ，好奇心，変化，娯

楽, 冒険, 成長, 創造性, 「読み書きの能力, 技能, 情報」, 「参加, 共同」, 「秩序」である。

上記の諸価値は何れも現実の文化の中に生きる人間の経験的な, 基本的欲求に関するものである。それは一般的な態度, 理想, パーソナリティ, 特性といったものではない。何よりも世界中の多くの個人と集団が益々同意を得つつある人間の目的を価値として定義づけたものである。換言すれば, 彼が理想とする民主主義実現の契機として最も基本的な最低必要事項とも云うべき欲求充足への経験的志向とみてよいであろう。例えば, 衣食住, 安寧といったような直接的な欲求は経済的不況に直接関係するものであり, 又彼の实在論の中心問題ともいうべき集団葛藤, 集団忠誠の原因でもある。

こうしたブラメルドの価値のリストは有機的な文化的实在の中であって, 単独な一組のセットとして抽出されるものでもなく, 又, 階級的な価値の配列も考えられるべきではない。これらの価値は互に重複し合うと共に, ここに挙げられていないものをも示唆していることは明らかである。

然し又, 我々はこれら諸価値の矛盾的側面を見逃すこともできない。例えば, 安寧と冒険の欲求, プライバシーと交友, 新奇さと秩序の欲求は明らかに不調和と矛盾を示すものである。こうした矛盾は, 一つには人間性の複雑さに帰因すると共に文化の状態に帰因するものであり, いま一つには, 如何なる個人もあらゆる欲求を同時に充足できない点にある。勿論我々は選択すべき価値の多様性を問題視するべきではなく, 寧ろ価値を志向する人間の行為の源泉に目を向けるべきであろう。こうした矛盾的な側面を伴う諸価値を止揚し, 包摂する価値こそブラメルドの「社会的自己実現」の価値であると解すべきではないだろうか。ブラメルドは決して人間性を一つの型に合わせようと云うのではない。逆に, 人間の欲求の多様な表出とその充足を果しうような文化を築くことが彼の文化改造の意図であるといえる。では社会的自己実現は具体的にどのように解されるのだろうか, 次にその点にふれてみよう。

(ii) 社会的自己実現

ブラメルドの先に挙げた諸価値は何れも, 社会の支配を受けないという逃避的な「～からの自由」ではなく, より積極的な「～への自由」, 換言すれば追求への自由である。即ち, 大多数の人びとが追求する欲求の充足であり, 目標到達への自由である。

したがって, 単に価値実現の障害を除去して欲求不満を解消するという消極的な立場は, ブラメルドの意味する価値の実現, 自由追求には不満足なものである。更に積

極的に、できるだけ多くの欲求を充足することが眼目であった。こうしたすべての価値を包括する最高の価値がいわゆるブラメルドの「社会的自己実現」である。この点についてワイン (J.P. Wynne) は「個人と集団の目的とか、価値とか、それらを条件づける長期の文化的デザインとか、目標を最大限に成就するというこの理想は社会的自己実現、又は自由の伸長としてブラメルドによってはっきりとデザインされた。かくて、社会的自己実現の理論はあらゆる教育経験と学校のプログラムの基準として提案される⁷⁾」ものと述べている。

ブラメルドはこの未来文化の規範的な基準として役立つものとしての社会的自己実現を「自由」と呼んでもよいと認めながら、しかもそれが伝統的な、言葉の主観的な意味に妨げられることをおそれて「自己実現⁸⁾」という表現をしているのである。それは、レッセフェールの自由主義秩序はも早通用しないとするブラメルドの文化的实在観によるものである。即ち、理想的、改造さるべき民主主義のもとでは独立的な存在としての個人の自由の代りに、協同的、公共的活動を強調し、個と集団の経験と知性を重視することから自由と云う表現を避け、社会的自己実現という表現を用いたものと解される。

“自己実現”ということは基本的な価値ではあるが、ここに“社会的”自己実現として定義されたのは次のような観点によるものである。即ち、自己を発見し、表現し、成就し、実現する個人は孤立した自我ではなく、自他の一体化したものであり、社会を離れて個人を考えることはできないというブラメルドの基本的な人間観と、集団を重視する实在観によるものである。

こうした社会的自己実現こそ人間が追求しなければならない包括的な価値であり、其処に内包される価値は個人か集団の何れかというのではなく、個人と集団の欲求の最大限の充足にある。そして、かかる価値の実現によって、「科学的、美的、宗教的目標はもとより、経済的、政治的、人間的目標も追求され成就されうる⁸⁾」とブラメルドは主張する。しかもこの社会的自己実現を論証可能ならしめるものとして文化に関する諸科学、即ち、心理学、社会学、歴史学、経済学、人類学と教育哲学の提携が求められたのである。換言すれば、こうした総合諸科学の助けをかりて人間の目標追求という心理学的事実と、倫理的規範の密接な相関関係を論証しようとし、又論証可能であると確信していた。即ち、集団が渴望し、追求する目標が追求する価値があることを論証し、更にそれを最高価値としての社会的自己実現に拡大しようとするものである。

以上のように、ブラメルドがユートピア的理想の実現を熱望し、その達成への課題

を教育に求めたことは明らかであるが、この社会的自己実現と政治との関係はどのように考えられたのか、次にその点にふれてみよう。

文化の改造、社会改造への情熱とあわせてブラメルドは世界秩序、世界政府の樹成を希求しその基礎として求められたのが民主主義である。そして、この民主主義——世界的民主主義——の為に提示された目標を我々が評価、唱導する規準がブラメルドの云う政治における社会的自己実現であると解される。

即ち、民主主義の在り方を評価してゆく規準となる。この間の関係をブラメルドは「民主主義が政治に対する関係は、社会的自己実現が価値論に対する関係と同じである⁹⁾」と説明している。

ブラメルドによれば、政治的には多数決政治が社会的自己実現の表現であり、多数決政治は社会的一致の働く形式である。然し、この場合ブラメルドの意味する多数決政治は彼の認識論上の操作概念である社会的一致が完全な意味で成就されたものでなければならない。したがって、単に投票による多数決の浅薄な、形式的な一致、多数者の横暴を許すものではない。又逆に少数者の独専権を認める政治でもない。いわゆる集団の知性を前提とした社会的一致を経たものでなければならない。

然し、多数者による社会的一致がどのように行なわれようとも、少数者の権利も守られなければならない。即ち、少数者の政治機能は付加的な、改訂的証拠のコミュニケーションを通して既存の政策はもとより、多数決によって決定、提案された行為を批判することである。改造主義者自身も又少数者であるが、その役割は「他の少数者、すなわち、自由の縮少に向って努力する少数者が主として自己の利益のために多数者を偽購しているという事実を多数者に説得し、信じさせることである¹⁰⁾」。

以上のように、多数決政治を通して政策決定に至る為の多数決の大前提として、ブラメルドは何が善であり、何が真であるかを決定する場合、如何なる少数者よりも多数者の立場がすぐれているという考えを抱いていたのである。要するに、ブラメルドの求める改造さるべき民主主義は、単なる象徴にとどまるべきものではなく、到達さるべき目標として、その完成の為に大衆の力に強い期待をかけ、そこに教育の課題を求めたのである。

4. 価値論への方法論的アプローチ

社会的自己実現が規範的な目標＝価値であることはすでに述べたとおりであるが、この価値実現への認識論上の主要プロセスとしてブラメルドは次の七つの役割を明ら

かにしている。即ち、(1)目標追求の役割、(2)直覚的意識 (Prehension) の役割、(3)非合理性の役割、(4)目的と手段としての集団精神の役割、(5)イデオロギーの役割、(6)ユートピアの役割、(7)真理追求における社会的一致の役割である。

これらは何れも文化的経験の所産でもあり、又条件でもあり、操作概念としてとりあげられていると解される。然し、これを価値論の観点からその機能を考察すれば、すべてが価値実現への方法論的プロセスとして並列的に考えられるべきものではなく、寧ろ社会的一致に対する基底性、補足的な役割を果すものと解すべきであろう。換言すれば、社会的自己実現を最高価値とする未来文化の構想を実現する為の、即ち、政治、経済その他の諸領域における徹底的な民主主義の世界的拡大を実現する為の最も中心的な操作概念が「社会的一致」であると考えられる。

ブラメルドはこの社会的一致を定義して次のように述べている。即ち、「如何なる文化でもあれ、その文化内部の集団生活における最も生き生きとした経験の真理は、それからが生み出す必要な満足によってのみ決定されるのではなく、それらの意味が関係する集団のできるだけ多くの人びとによって同意され、又それに従って行動される程度によって決定される。その同意を検証する行動を伴わなければ経験は真ではない」と¹¹⁾。そして、ブラメルドの社会的一致は、目標追求と未来構成という重大な機能にとって最も重要な、唯一の規範たるべきものとして考えられた。

この社会的一致におけるプロセスとしての四段階についてはすでにふれたとおりである。要するに、正当なプロセス——証拠の検討、他の意見の尊重と評価等々——を慎重に遵守することが基盤である。しかも、改造主義者の政治的、経済的、社会的プラットフォームを構成する青写真（或は又、規範的デザインと云われるものは）は各々の場合に社会的一致に基づかなければならないと考えられたのである。

以上のようなブラメルドの社会的一致の成立基盤と、その解明をはかる為に大きく分けて三つの視点から次に考察してみたい。

第一は、形而上学的、絶対的な真理、価値を否定し、常に修正と改善にさらさるべき試案的なものとして真理及び価値を追求するブラメルドの未来を志向する価値論的態度である。この点については、すでに「未来志向性」のところ述べておられる。

第二は、ブラメルドの人間観、社会観、特に集団重視の彼の實在観が社会的一致の基盤にあると考えられる。即ち、人間は目標追求の動物であり、個人的な特殊な目標はもとより、社会的、文化的な目標を追求するものであると云うのがブラメルドの基本的な人間観である。換言すれば、目標追求こそ人類の本質的な特徴であり、人間努

力のモチヴェーターであると考えられた。人間の基本的目標は、欲求不満を解消することだけにとどまらず、積極的に、できるだけ多くの欲求を最大限に充足しようとするところにある。然し、人間は個体として、そのみでは決して完全な機能を果しうるものではなく、常に特定の社会的な媒介を通じてその機能を果すものであると考えられた。要するに、自己を発見し、表現し、成就し、実現する個人は孤立した自我でなく、自他の一体化したものであり、社会を離れて個人を考えることはできないと云うことである。したがって、望ましい文化の在り方、即ち、「よい社会」が「よき個人」に先行すると云うのがブラメルドの個人対社会観である。しかも、文化の中に生きる自他相互の関係は、根本的には対立的なものではなく、協調的であると云うブラメルドの人間関係論の必然的な結果として、事実についての協同的な検討、同意、実行という一連の手順によって得られる社会的な一致が強調されたのである。

こうした考え方の背後に、人間性に一種の経験的に普遍的な性質が存在し、共通の価値を求めているというブラメルドの前提を見逃すことはできない。換言すれば、人間共通の理解の場、すなわち「人間の問題を処理し、共通の同意が成立する為には、その背後にある人びとの考え方、感じ方などの広範な共通性がなければ人びとは集団的な社会生活を円滑におくることはできない¹²⁾」ということである。

以上の点からも明らかのように、ブラメルドにおいては人間関係の問題が人間の諸問題を処理、解決し、文化の改造をめざす場合の公分母と考えられる。

ブラメルドはルネッサンス以後の個人主義化、利潤追求の資本主義の台頭の結果、個人が生活のすべてであるとする苛烈な個人競争を惹き起し、経験の孤立化を来した点を指摘し、人間関係において経験の孤立化を是正することを強調し、関係性を重視している。そして、人間関係の分野こそ改造をめざす文化の分裂過程に激しく挑戦するものと解される。然しそれは、文化的諸問題に対処し解決する為には社会化された行動でなければならないというブラメルドの集団の重視、言い換えれば、真理と価値を追求する為の協同的な手段の重視を離れては考えられない。

ブラメルドが認識論上の操作概念としてとりあげた集団精神についてみても、それは多数の個々人、或は集団が一つの目標の為に団結したと云うことを前提とした概念である。したがって、我々はこの集団精神をブラメルドの人間関係概念の枠組の頂点に位置するものと解してよいのではないだろうか。

ブラメルドが集団精神という時、それは個人精神とは違った何か神秘的な実在に訴えているわけではない。集団とは、人びとが自分達の共通的な経験を想起し、批判し、それらを未来の経験の為の規範として用いるものと考えられる。要するに集団が

証拠を集め、ユニコミュニケーションを行ない、同意をもたらし、その決定に基づいて行動する時、其処に集団精神が働いているという意味である。

社会的一致成立の基盤として考えられる集団という公分母に対して、こゝに云う集団精神は目的及び手段として考えられている。即ち、集団精神が多数者の社会的一致への到達を意味する時には集団精神は樹立させるべき目的である。同時に又、集団の目的を達成する手段として社会的一致を考えれば、集団精神は手段でもある。要するにブラメルドは社会的一致を通しての真理を集団精神のユートピア的内容と解していたとみるべきではないだろうか。

次に第三として認識論上の他の諸機能の視点から社会的一致へのアプローチがなされねばならないだろう。即ち、集団の機能と、そこに働く集団精神が重視されているところでは、イデオロギーとユートピアの概念は単なる抽象概念としてではなく、社会的一致を通しての価値実現に操作的に機能を果すものと考えられねばならない。既存の文化的実践、習慣、制度、文化的諸特質を合理化しようとする保守的態度として考えられたイデオロギーの働き、及びそうした現状維持的保守性に対して未来を志向する進歩性を象徴するユートピアの役割が、共に文化的経験の所産でもあり、又条件でもあるとして重視されねばならない。

ブラメルドのイデオロギー重視は文化改造への障害としての否定的な意味に於いてである。換言すれば、イデオロギーは文化の構造、実践を正確に反映するとは限らず、その保守的態度の故に人間の目標追求をにぶらせ、又その障害となる。もしもイデオロギーが現代の諸特質から最も利益を受ける人びとの中に、自らを正しいとする態度をうち立てるならば、社会的一致を通しての価値実現は歪曲され、崩壊するであろう。

こうしたイデオロギーの反対の極に重視されたのが、人間の目標追求気質の必然的な所産としてのユートピアの役割である。それは、ブラメルドによれば「現在の文化とは明らかにことなる文化の考え方を支持する態度、実践、観念、制度の絵にかいたような表現である」。

然し、ユートピアは科学的な原理のみでは完全に説明されえないものであり、そうした意味では非合理である。ブラメルドがこの非合理性を重視した理由も、それが個人的、社会的経験の動因となり、社会的、文化的方向づけとして働くからであり又、集団の交流を通しての社会的一致に至る動因となると考えられたからである。ブラメルドの意味する非合理とは「消極的には合理的な力によって支配されない個人と集団の信念、行動を意味し、積極的には自覚的意識にのぼらない人間の諸力である」¹³⁾それ

は単に合理的ではないと云うだけで非難されたり無視されたりすべきものではない。何故ならば、ブラメルドの云う価値は人間の欲求充足にあり、しかも人間的性格を規定すると考えられる欲求に含まれた非合理性は、価値実現への不可避的な機能であると解されなければならないからである。

次に、社会的な一致へ到達する為に個人的側面からとりあげられたプリヘンション（直覚的意識）の役割についてはどうであろうか。

このプリヘンションは進歩主義の実験的、科学的方法を補足するものとして特に重視されている。ブラメルドの云うプリヘンションとは、単に知的、合理的に経験的事象を把握するのではなく、全人的な存在として想像力、情緒、身体すべてを融合し、全体的に意識し、把握することを意味している。このプリヘンションと対象的にとりあげられるのが、アプリヘンション（分析的意識）であり、構成分子を知性が知覚し、分析的に認識する働きである。目標追求に於いては直覚的意識から分析的意識へと認識の過程を経て進み、相互に補足し合い、互に他の性質を吸収する時に効果的な学習ももたらされるというのがブラメルドの主張である。要するに、両者ともに個人の公正な、偏向のない認識活動に欠くべからざるものであり、それはやがて社会的な一致に到達する為の正しい文化観、世界観を樹立する基盤であると考えられた。

結 び

以上で明らかなように、ブラメルドの改造主義教育哲学への問題意識を危機文化の中に求め、価値実現への方法論的概念としての社会的な一致の解明につとめてみた。

ブラメルドが、民主主義こそ人間の作り出した如何なる社会の形式よりも、地球上の最大多数の人びとに最大限の幸福を与えうるものと信じ、この社会的な一致という民主的プロセスをその中心機能として提示した意義は高く評価されなければならないだろう。

勿論ブラメルド自身、現状では社会的自己実現は極めて不完全にしか行なわれていないことを認め、その理由を、一つには個人と集団が自己の利益の為に、価値についての公正な検証と卒直な同意を拒んでいることに、いま一つには教育の欠陥に求めている。

こうした点についての探求は後の機会に触れることとして、以下社会的な一致をめぐる問題点を概括して結論としてみたい。

問題点の先づ第一としては、ブラメルドが人間そのものを掘りさげていくアプロー

チの仕方をとらず、個人的な過程としての認識に十分な注意が払われていないところに価値論全体を通じての難点があるのではないだろうか。第二に、社会的一致が集団を重視する結果、民主主義の最も基礎となる個人は埋没され、全体主義におちいりはしないだろうか。

第三に、我々は集団精神と未発達な集団道徳のような曖昧な抽象概念の背後にかくれて、自己批判と個人的決定という責任を容易にのがれるおそれはないだろうか。

こうした点については、改造主義の価値論は、個人の欲求が同時に社会的欲求であることを認め、個人的且つ社会的自己実現を最高価値としている点に解決を求めているものと解される。

然し、上記のような問題点はすべてブラメルドのユートピアニズムと、更には社会的一致の概念の曖昧さに、即ち、正当なプロセスとしての社会的一致、及び同意が存在するという単なる事実としての社会的一致との根本的な区別が判然としない点に帰因するのではないだろうか。ブラメルドは、社会的一致はプロセスでもあり、同意の状態でもあると認め乍ら、更に社会的一致は目標への信念の妥当性を検する最も重要な、唯一の規範たるべきものであると断言している。この点に問題があるとすれば、それはブラメルドの「規範」の解釈ではないだろうか。もしも一般に同意されているという単なる事実が規範であると解すれば、当然上記のような問題点が指摘され、無知が多数を支配する限り、無知の支配への道を開いたことにはならないだろうか。勿論、こうした結果はブラメルドの意図するものではないことは明らかである。

目標追求と未来構成へのこの「規範」としての社会的一致は、言葉の完全な意味において正当なプロセスを完全に厳守するというその「程度」の問題であり、知性に基づいた科学的方法と民主的相互説得のプロセスを表わすものと解すべきではないだろうか。

要するに、社会的一致のプロセスの根底には、健全な個人相互の関係、集団相互の関係、個人と社会の調和、相互理解と協力へのユートピア的理想像があると解される。換言すれば、人間の緊張や敵意が如何に根深く、慢性的なものであろうとも、やがて改善されうるという確信が社会的一致の成立を可能ならしめていると見るべきである。

以上のように、幾つかの問題点はあるにしても、人類が制度上の不均衡はもとより、価値体系の混乱状態にあると云う現実をふまえ、我々すべての者が依拠しうる人間的、文化的価値を探求し、その方法論としてとりあげられたのが上述の社会的一致である。

特に集団を重視し、広い社会的一致、とりわけ労働階級の自覚と集団の知性を信じ、世界的ユートピアの実現を確信し、改造的な方向づけを重視した点に特色があるといえよう。尚、ブラメルドの教育哲学全体を理解する為には、彼の文化と教育の問題、教育の人類学的アプローチ、学習課程論等々多くの問題がとり挙げられなければならない。然し、こゝでは先にも述べたように、「社会的一致」の概念に焦点をしばり、いわばこれはブラメルドの価値論への序論とでも云うべきものである。

註

- 1) Toward a Reconstructed Philosophy of Education, P. 19
- 2) Cultural Foundations of Education, P. 17
- 3) Toward a Reconstructed Philosophy of Education, P. 93
- 4) Philosophy of Education in Cultural Perspective P. 76
- 5) Ends and means in Education P. 15
- 6) Toward a Reconstructed Phi. of Ed, P. 141
- 7) Theories of Education, by Wynne, P. 426
- 8) Toward a Reconstructed Phi, of Ed, P. 119
- 9) Toward a Reconstructed Phi, of Ed, P. 123
- 10) 改造主義の教育学（井上 弘著）P. 145
- 11) Toward a Reconstructed Phi, of Ed, P. 93
- 12) 教育的価値論（田浦武春）P. 145
- 13) Toward a Reconstructed Phi, of Ed, P. 82

参 考 文 献

1. Theodore Brameld : Education for the Emerging Age.
2. Theodore Brameld : Toward a Reconstructed Philosophy of Education.
3. Theodore Brameld : Philosophy of Education in Cultural Perspective.
4. Theodore Brameld : Cultural Foundations of Education.
5. Theodore Brameld : A Reconstructionist View of Education in Philosophies of Education By j. Wiley.
6. John P.Wynne : Theories of Education.
7. Brubacher : Modern Philosophy of Education.
8. Owen R. Jones : The School Principal.
9. E.V. Sayers and W. Madden : Education and the Democratic Faith.
10. 田浦武雄：教育改造の思想
10. 田浦武雄：教育的価値論
11. 松田義哲：改訂教育哲学
12. 井上 弘：改造主義の教育学